

長期にわたる異文化接触による文化変容

——アメリカ・ブラジルにおける日系高齢者のフィールドワークをとおして——

金 本 伊 津 子

1 はじめに

文化人類学・心理学・言語学の分野においては、文化は人間の成長過程で獲得・形成されるものとして認識されてきた。しかしながら、文化は人間の一生を通じて——年老いた老人になっても——獲得され続けるものなのであろうか。老いと共に始まる喪失の連続——例えば、思考力や記憶力の衰え、身体機能の低下、社会や家族における役割の喪失など——を文化獲得のモデルで捉えることができるのであろうか。

複数の文化を獲得して老いを経験するもの（例えば、海外に移住した日本人やその子孫である日系人）は、多数の文化的要素が複雑に絡み合った老いの過程を辿る。自らを変容させることにより、ホスト社会の中流層に「うまく」適応してモデル・マイノリティとなった日本人・日系人は、日本で生まれ日本で老いを迎える「日本人」、同様の意味での「アメリカ人」や「ブラジル人」とは違った老いを経験している。アメリカのエスニック・グループの中で最も高齢化が進んでいる日系コミュニティや、人口構成の若い国・ブラジルで一足先に高齢化を迎える日系コロニアに帰属する日本人・日系人は、自らの老いと対峙するために、エスニシティを再認識するそれぞれの人生のステージにある。

この論文においては、これらの両社会で長期に渡る異文化接触を経験した日系高齢者（主に1世を中心に）に焦点をあて、多文化社会におけるエスニシティと老年期に起こる文化喪失の過程（Anderson 1972）——あるいは、エスニシティへの回帰——が、相互に関連しあう領域に文化人類学的考察を与えるものである。この多文化社会における老いの研究は、海外における日本人の異文化適応の問題、日本におけるエスニック・マイノリティの老いの問題、日本社会への移民受け入れの問題、日本人高齢者の海外移住の問題など、日本・日本人に関連する様々な社会問題に新しい視点を提供するものである。

2 フィールドワーク・リサーチ

この研究は、1993年よりトヨタ財団の研究助成を受けてアメリカで開始したフィールドワーク調査と、1998年より平安女学院短期大学特別研究費、2001年より文部科学省科学研究費

の助成をうけてブラジルで実施したフィールドワーク調査で収集した資料をもとにしている。フィールドワークにおける調査項目は以下の5つである。

- (1) 各多文化社会における日系コミュニティの成立過程と高齢化の過程
- (2) 日系老人を取り巻く社会的状況——家族と支援ネットワーク
- (3) 日系老人を支える福祉施設の設立の歴史とそこでの日常生活

ここで取り上げる多文化社会の中には、日系老人のための福祉施設が設立されている。フィールドワークを実施した施設は以下のとおりである。

アメリカ：敬老引退者ホーム、敬老ナーシング・ホーム、南敬老ナーシング・ホーム、東京タワー（以上、ロサンゼルス）、KIMOCCHI（サンフランシスコ）、タマイ・タワー（デンバー）、クワキニ・ホーム（ホノルル）

ブラジル：サントス厚生ホーム、スザノ・イペランジア・ホーム、憩いの園、井口老人ホーム（以上、サンパウロ州）、和順会老人ホーム（パラナ州マリンガ）、厚生ホーム（パラ州ベレン）

- (4) 日系老人のオーラル・ライフ・ヒストリーにみる老いの過程

個人のレベルにおける文化変容の過程を分析するために、ライフ・サイクル全般に渡っての資料が必要となる。非指示的面接方法により日系高齢者のオーラル・ヒストリーを収集したコミュニティは以下のとおりである。

ロサンゼルス、サンフランシスコ、ホノルル（以上、アメリカ）、サンパウロ、サントス、スザノ、カンボス・ド・ジョルダン、グアタパラ、リオ・デ・ジャネイロ、フンシャル、ヴィトória、ロンドリーナ、マリンガ、トメアス、ベレン（以上、ブラジル）

- (5) 各多文化社会における他のエスニック・グループの老いの現状

3 超・高齢化する海外日系コミュニティ

高齢化の過程を邁進しているのは、長寿国・日本だけではない。アメリカの日系コミュニティもブラジルの日系コロニアも、1880年代よりハワイ、アメリカ本土、ブラジルに移住した日本人（1世）だけでなく、その子孫（2世や3世）も老年期に達し、日本と同様、高齢者の急増という社会問題に直面している。

アメリカの人口調査にみると、1980年に日系総人口の7.5%であった日系老人人口（65才以上）が、1990年には12.5%にまで膨らんでおり、今までにない高い増加率（166.7%）を記録している（U. S Department of Commerce, Bureau of the Census 1988, 1993）。白人系が113.5%、中国系が111.1%、黒人系が101.2%という他のエスニック・グループの増加率と比較しても、アメリカ日系社会の高齢化は抜きんできた状況にある（金本 1993：33）。（ちなみに、2000年以降は、“race”に関わる分野が変更されたため、“Japanese”というカテゴリーにより通時的な比較が可能なのは1910年から1990年までである。）

ブラジルの人口調査（1920年～1990年）においては、移民の出身国籍別と年齢別統計が不在のため、人口調査から日系コロニアの高齢化の様相を計り知ることはできなかった。肌の色（côr）（“branca [白]” “preta [黒]” “amarela [黄]” “parda [褐色]” “indigena [土着]” の5つの分類）による統計はあるが、調査員が目視した肌の色に基づいており、この分類は必ずしも「人種」を示しているわけではない。例えば、色の白い日系人は、「白」に分類されることになる。したがって、日系総人口も正確に把握できていないのが現状といえようが、日系機関が実施した調査（サンパウロ人文科学研究所 1995a, 1995b；サンパウロ日伯援護協会 2003）から推定すると、1995年で6.5～7.3%という高齢化率が試算できる。ブラジル日系コロニアは、アメリカ日系社会よりも「まだ若い」という印象であるが、著者がワールドワークを実施したグアタバラ移住地（サンパウロから内陸部に向って約300km）においては、高齢化率40%という驚愕的な数字を目の当たりにしている。人口構成の「若い」国・ブラジルにおいては、高齢化そのものが社会全体に均一的に進んでいるわけではなく、エスニック・グループにより、また地域によってかなり違った様相を呈している。

4 アメリカ日系コミュニティとブラジル日系コロニアの成立過程

アメリカ日系コミュニティの成立過程

アメリカ（1898年に併合されたハワイも含めて）における日本人の異文化接触は、江戸幕府によって日本人の海外渡航が許可され、「元年者」と言われる日本人契約労働者がハワイに到着した1868年に遡る。この多くは、明治時代に始まった近代化・西欧化の影響をまともに受けた農民であった。一攫千金・錦衣帰郷を目指して、プランテーションやピースワーク（出来高払いの仕事）に従事する「デカセギ」感覚の低賃金の海外労働者であった。

これらの1世は、2世の誕生とともにアメリカ定住化の兆しを見せ始める。「呼び寄せ」「写真結婚」によってアメリカに家庭を築き、アメリカの市民権を持った2世という世代を日本的に育成した。日本で教育を受けた経験のある「帰米」といわれるグループもこの世代である。外国人排斥土地法（1913年）が制定されるころから排日運動が高まってくるが、1世は、アメリカ社会で生き残るためには、2世のアメリカ社会への同化——つまり、アメリカの公教育——が重要であることを認め始める。こうして、2世は、家庭とコミュニティを通して日本語、日本的価値観と行動様式を、学校を通して英語、アメリカ的価値観と行動様式を学ぶことになり、2つの文化の橋渡し役となる。

1941年12月、日本がパール・ハーバーを攻撃して太平洋戦争が勃発する。アメリカに残った1世と2世は「敵性外国人」として強制収容所に送られた。アメリカ市民であった2世たちは、失墜した日系人の信用を大幅に回復する手立てとして、アメリカに忠誠を誓いアメリカ軍に志願兵として従軍した。ヨーロッパ戦線で大活躍した442部隊は、今でも日系コミュニティから賞賛されている。戦争に負けた日本に帰る夢を完全に絶たれた1世たちは、帰化権を認められたのをきっかけに「永住」へと再度の転換を計り、終の住み処としてアメリカ

を選択する。将来必要となる社会保障を、日本からでなく、アメリカから得たいと思う者も少なくない (Kanamoto 2000)。

ブラジル日系コロニアの成立過程

ブラジルへの移民は、1908年に笠戸丸がサントスに到着したときに始まる。多くの日本人が、コーヒー、綿花、サトウキビなどのプランテーションでの働き手として奥地に入植していった。アマゾンへの入植が始まったのは、20年後の1928年のことである。

アメリカ同様、一攫千金・錦衣婦郷を夢見たデカセギ感覚の1世は、2世の誕生によりブラジル社会への定住化を開始する。農業従事者からスモール・ビジネスへの展開をへて経済的な成功を収め、社会的信用を徐々に築きあげていく。ただ、アメリカと違って、女性と出会う機会がない、経済的に結婚できないなどのさまざまな理由から、「家族」と関係のない人生を歩むことになった独身男性が多かった。これが後に日系コロニアの身寄りのない「孤独老人」として1つの問題に発展する。

1941年に太平洋戦争が始まり、その2カ月後、サンパウロ州政府は日本人を「敵性国民」とみなし、日本語で記されたものの頒布、公共の場での日本語の使用、通行許可書なしの旅、保安局への予告なしの転居などを禁止した。路上で日本語を話した者がスパイ容疑で警察に拘引されることが頻繁となる。

1945年、日本が降伏する。降伏文書がポ語新聞には掲載されたが、「降伏はデマ。実は日本が大勝利」というニュースが流布され、日系コロニアは混乱していく。日本の勝利を信じる者(勝ち組)が、敗戦を口にする者(負け組)を非愛国者として襲撃・殺傷・暗殺する事件が1947年ごろまで相次いで起こる。この「勝ち組」「負け組」の争いは、戦後の日系コロニアに深い傷を残すことになる。戦後、1953年に移民が再開されるが、ブラジルの日系人の中で「錦衣行」から「永住」への転換が起こる(金本 1999)。

アメリカの日系コミュニティと比較してみると、ブラジルの日系コロニアは可視的で、県人会、婦人会、老人会、文化協会、援護協会における1世や準2世(日本生まれ日本育ち、子どものときに渡伯)の活動を中心にコミュニティの形を保ち、その十分な機能を果たしていた。ただし、地方の日系コロニアにおいては、1世の高齢化が進み介護の問題が顕在化する中、ゆっくりとした世代交代が始まりつつあるところで、新しい日系コロニアの姿を模索している。

5 老いのエスノグラフィー

アメリカ日系老人のアクティブ・エイジング

日系人口が集中しているカリフォルニア州ロサンゼルス日系コミュニティは、異文化で老いを迎える1世を憂い、言語・食・余暇活動にいたるまで日本的な生活空間を提供できる福祉施設を戦前移民の1世のために設立した。1964年に日系人のための老人福祉施設を建設

するための基金を設立し、日系病院を母体として、1969年にナーシング・ホームを、1975年には引退者ホームを完成させた。1日1回はご飯や梅干が気兼ねなく食べることができ、小学唱歌や軍歌を遠慮なく大きな声で歌うことができ、日本の歳時記に則った年中行事で日本の季節を感じることができ、日本語で語りあえる友達を持つことができる文化的環境を育てた (Kanamoto 2000)。

この福祉事業のモデルとなったのは、ブラジル・サンパウロにあるユダヤ人のための老人福祉施設であった。この施設は、ブラジル社会の中でもユダヤ文化を再現した小宇宙を構成している。筆者もブラジルでのフィールドワーク中に訪問したが、ユダヤ教の司祭・ラビの常駐、礼拝堂の完備、それに、厳選された調理人が雇用されていた。ユダヤ人はコーシャ・フードといわれる特別な調理方法による食事に制限されているため、宗教的な知識を兼ね備えた調理人のみならずコーシャ・フードのための2つのキッチンが用意されていた。このユダヤ系老人のための文化的環境は、ユダヤ人からの寄付によって賄われており、この事実はアメリカの日系コミュニティに大いなる刺激を与えたのであった。

盲目の妹と暮らしていた2世の女性(享年82歳)は、「(他の公的な施設から)引っ越してきたの。(1カ月に払うお金の金額は)安かったけど、そこの食事はひどかった。私たちはおかあさんが作ってくれた食事で育ったからね。そう。日本食。でも自分では作れないし、妹の世話もありますし」という。夫を白血病で亡くし、アメリカ政府からの補助SSI(補足的保障所得)で生計をたてている1世の女性(84歳)は、「私は能力もなく性格もこのように暗いけど。この年になって、この施設で人生の出番をもらった。本当に感謝している」といって、小学唱歌、童謡、軍歌を歌い集う日系老人のためのオルガン伴奏に人生の生きがいを見つけた。

日本語がほとんど話せない3世の女性(76歳)は、「私はいままで白人の間で教育を受けてきたし仕事もしてきましたから、私は自分のことを日本人だと思っていました。だからここに来たのです。でも、私はここでは日本人じゃない。異国で生活しているようなものです。私が“Good morning!”と(英語で)挨拶しても誰も答えてくれない。ここはアメリカなのに」と苛立ちを隠せない。彼女が指摘するように、ここにはアメリカの文化の影は薄い。アメリカの日本人・日系人の経験の総体から共有されている文化システム——エスニシティ——が、ホスト社会からは異質で逸脱したものに見えるが、決して凌駕されることなく息づいているのであった。

ブラジル日系老人のアクティブ・エイジング

1958年、移住50周年記念事業として「健康で身寄りがなく経済的に困窮している」日系老人を対象とした施設が開設され、1959年には、日本移民援護協会(後のサンパウロ日伯援護協会)が発足する。当時、老人は生活困窮者として認識されており、身寄りのない孤独な日系老人が、救済・援護の対象となった。これらの施設は、食料なども日系コロニアからの寄

付に頼るところが多く、居住者はそれぞれに割り当てられた家事や作業に多くの時間を費やすなど、アメリカの福祉施設とは全く違った雰囲気醸し出している。1970年代になると、要介護老人の数が増加し、「寝たきり老人」や「痴呆」対策が大きな問題として認識されるようになる（サンパウロ日伯援護協会 1999）。

これらの老いの問題に対応するために、1973年から各地で「老人クラブ」が結成され、日系コロニアの中に老いに対する認識が深まってくる。サンパウロに住む多くの日系高齢者たちは、1日を共に過ごす友を求めて日本人街リベルダージに集まる。朝6時から広場で日本のラジオ体操をして、県人会館や文化協会に集いカラオケ・ダンス（カラオケで日本の演歌や軍歌を歌い、その伴奏で社交ダンスを踊る）に興じ、日本から輸入したゲートボール1式で試合を楽しみ、手作りの饅頭をほおばりながら日本語のおしゃべりで情報の交換をする。異文化の中の日系老人の姿は、それぞれの社会の主流文化を受容しながらも、生き活きとその主張や存在感を呈している。

パラナ州マリンガの老人会などは、月1回の会合に100名近くの日系老人が参加している。講演会、体操、日本食の簡単なプログラムであるが、現在でも人気が高い。その他、県人会、婦人会、地域の文化協会などの活動（ゲートボール、体操、カラオケ、社交ダンス、民謡、舞踊など）を通してアクティブ・エイジングを実現している日系老人は多い。

長崎で被爆した1世の女性（78歳）は、「毎週ここで（老人クラブの会場）歌の練習をするの。NHKの『のど自慢』に出演して、日本で演歌歌手になるの。カラオケ・ダンスの人もいれるといつも100人ぐらいは集まる」という。コロニア文芸の一端を担う俳句の会を主催する1世の男性（82歳）は、「ブラジルは日本と季節が違うので、とても面白い俳句ができます。いままで『ブラジル季寄せ』しかなかったのだけど、アマゾンでも歳時記を編纂するほど、俳句人口は減っていません」という。

異国の地で老いを謳歌している日系老人たちにも問題がないわけではない。社会保障制度が未整備であるブラジルにおいては、しばしば福祉の重荷をそれぞれのエスニック・グループに肩代わりさせているところが見受けられる。日系老人にとっては、「老いた親の面倒は子どもがみる」という日本の伝統的価値観が日系老人たちの拠所であった。しかし、2世・3世間で進むインターマリッジは、家庭内の文化環境を複雑化し、1990年頃より急増した日本へのデカセギが、日系社会の空洞化のみならず、老人を支える介護人の不在化を引き起こした。若い世代の日本への移住・定住は、老いに纏わる新たな問題を浮上させた。老親をブラジルに残したまま、あるいは施設に入れたままにするケースが頻発してくる。生活費を仕送りしてくる場合はまだいいが、その仕送りも途絶えてしまうことも少なくないという。何十年も祖国に帰ることのなかった移民たちが、年老いて、経済的な拠所として日本からの年金を切望するなど、ブラジルの日本人移民の老いは、きわめて特異な状況下にあるといっても過言ではない。

日本を離れる時には気にもしなかった年金であったが、思いがけない日本からの年金の恩

恵に浴している人たちもいる。リオ・デ・ジャネイロの東に位置するフンシャル移住地は、15年間北海道の危険な炭鉱で働いていたことにより受給資格が認められ、支給が決定された人々が多く居住する地区である。

日本の年金で新しく家を新築した夫妻は、「ブラジルに到着してから、私たちはたいへんでした。長男を大学にやらせることもできなかった。家族を助けるため、働いてもらうほかなかったのです。私たちの農園は、家族を養えるだけ充分なお金を稼ぎだしてはくれなかった。年をとってきて、時々老後のことを心配することもありました……今は、日本からの年金を貰っています。大体1年で130万円ぐらい。日本の円は、ブラジルのヘアイスの3倍から4倍になりますからね。これで生活しているのです。この家も建てました。このお金には感謝しています。……いつも息子には『私たちは日系の老人ホームに行くから、心配しなくてもいいよ』と言っています。そうするのに充分なお金がありますからね」という。

筆者が監修した『ブラジル日系社会高齢者実態調査』（2003）によると、日系老人の大多数は、月に最低賃金の1～3倍（調査を実施した2003年のサンパウロ州の1カ月の最低賃金は、約187ヘアイス（約7500円））までの老齢福祉年金を受給しているという実態から考えると、年金を受給できる年になって初めて実感する「祖国」との繋がりであるといえよう。

6 おわりに

本研究においては、日本人の異文化への適応過程を長いタイム・スパンで取り上げ、それぞれの社会における文化変容の全過程の検証を試みた。異質なものを対峙させる対立型多文化社会であるアメリカ、異質なものを融合している統合型多文化社会であるブラジル、これらの両社会においても、日本人高齢者・日系老人の姿は、それぞれの主流文化を受容しつつも、生き生きとその存在感を主張している。日常の生活における、例えば、味、におい、歌、リズム、ことば、場所、ストーリー、ヒストリー、人物、シンボル、イメージなど、日本人・日系人が保持してきた記憶の総体——エスニシティ——に対するこだわりは、したたかに保持され、継続的に観察される。長期にわたる日本人の異文化への適応の過程は、実はホスト文化への一方的な同化の過程ではなく、自文化（あるいはエスニシティ）を両立した過程であり、老いとともにもそこに回帰する過程をも含んでいることが明らかとなった。

付記

この論文は、第29回桃山学院大学・啓明大学国際学術セミナー（平成20年11月6日）において口頭発表したものと、『書齋の窓』（有斐閣）（平成19年7月～12月）に掲載された「老いの人類学①～⑤」の一部を編集・加筆したものである。

また、本研究は、トヨタ財団研究助成「日本人の異文化適応——アメリカ多文化社会における日本人移住者の老い」（助成番号93-1-131, 研究代表者：金本伊津子）、科学研究費補助金（萌芽的研究）「ブラジル多文化社会における日本移民の老いとエスニシティに関する文化人類学的考察」（課題番号13871043, 研究代表者：金本伊津子）、同（基盤研究 C）「多文化社会における日本人移民の老いとエ

スニシティに関する文化人類学的考察」(課題番号16520513, 研究代表者 金本伊津子)によるものである。

引用文献

- Anderson, B. G. (1972). "The process of deculturation: Its dynamics among United States aged." *Anthropological Quarterly*, 45, 209-216.
- Kanamoto, I. (2000). "Activating ethnicity: An anthropological study of aging among Japanese immigrants in the United States." (Ph. D. Dissertation, University of Oregon)
- U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. (1988). "1980 census of population: Vol. 2. Subject reports: Asian and Pacific Islander population in the United States: 1980: Section 1. Tables 1-47." Washington, DC: U. S. Government Printing Office.
- U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. (1993). "1990 census of population: Asian and Pacific Islander population in the United States." Washington, DC: U. S. Government Printing Office.
- 金本伊津子 (1993) 「アメリカ多文化社会における日本人移住者の老後——日系老人福祉施設における日本文化の意味」『社会学・社会福祉学フォーラム』第3号, pp. 33-52 (神戸女学院大学大学院)
- 金本伊津子 (1999) 「ブラジル多文化社会における日本人の老い——「憩いの園」の老人たち」『平安女学院短期大学紀要』第29号, pp. 20-30
- 金本伊津子 (2008) 「多文化社会における日本人移民の老いとエスニシティに関する文化人類学的考察」(平成16～平成19年度科学研究費補助金報告書)
- サンパウロ人文科学研究所 (1995a) 『ブラジルにおける移住者1世の高齢化の現状と対策』
- サンパウロ人文科学研究所 (1995b) 『ブラジルにおける日系高齢者の現状と特徴』
- サンパウロ日伯援護協会 (1999) 『援協四十年史——サンパウロ日伯援護協会創立四十周年記念 1959-1999』
- サンパウロ日伯援護協会 (編), 金本伊津子 (監修・共著) (2003) 『ブラジル日系社会高齢者実態調査 (要介護者老人実態調査)』サンパウロ日伯援護協会

金本伊津子氏の報告をめぐる討議

金本伊津子先生のご講演は、ブラジル日系移民およびアメリカ日系移民に関する長期のフィールドワークに基づいた内容である。とくに移民の高齢化に焦点をあて、高齢者の生活圏で共に暮らし緻密な現地調査を重ねて、高齢者たちの活動や考え方について重層的な分析を遂行している。高齢化に関わる基礎的な統計に始まり、現地の人々の活動に関するものまで幅広い資料が提示され、ブラジルやアメリカにおける高齢化の状況はもちろん、高齢化の過程をどのように生きるのかという普遍的な課題に関し、私たちがそれぞれ考察するにあたって不可欠の有益な情報を与えている。

コメントの第一の観点は、ブラジル日系移民やアメリカ日系移民の老いの過程においてエスニシティの意識化や強化がみられるという指摘に関するものである。高齢化あるいは老いの過程では、一般に、身体の老化、病や死の意識化、子育てや仕事の第一線で活動するという生活から自分の時間が増加する、という変化などがみられよう。それは、ライフサイクルにおいて、「死への存在」であることに思い至り、この世からあの世へ渡ってゆくという大きな変動を実感することでもある。こうした変動の時期を生きるにあたって、感覚を共有する人々と共に過ごす時間をもつことは、生活を豊かにする一つの要素だと考えられる。とはいえ、高齢者が孤立を免れ、そのような空間や時間を確保するには、そうした人々が出会うきっかけや共通の時間を過ごすことを可能にするシステムが不可欠であろう。講演の内容から、ブラジルやアメリカへの移民の場合、経験や理解は現実には多様であっても、移民の歴史という「物語」を思い起こし語ることや、「日本文化」に関する催しや集いに参加するという機会には恵まれているとみられる。そうした機会をとおして、「エスニシティ」感覚は常に刺激を受け、まさにその感覚が、生き生きと活動する契機となっているケースもあり、人々が生き続けることを助けるという側面も感じられる。

活動を可能とする機会として、多くの移民たちが集う場となってきたキリスト教の一派の教会活動も、老いの過程にある人々が安定的・継続的に出会い、互いにケアをするという、繋がりの実践を支援する一つの要素として機能していると思われる。

「エスニシティ」に基づく活動や「宗教」関連活動などによって出会う人々は、具体的な食べ物や歌、俳句など「日本文化」と関連付けられた楽しみの時間を共有する。「移民」してきたことに端を発するこれらの活動は、一世からの歴史のなかの苦労やその語りという共通の基盤に支えられ、「文化を伝える」という希望に開かれ、世代を越えてコミュニティに活力を与えてきた側面があろう。

とはいえ、コメントの第二の観点として、異なるエスニシティの人々との結婚（インターマリッジ）も進んでいる現在、世代間の意識や活動に現れる繋がりのある変化が目目される。「エスニシティ」の強化がみられる、移民の経験を共有する同世代の人々の繋がり

は確保されても、「文化」をめぐる子ども世代との繋がりはどのような変化を遂げているのだろうか。また、同世代であっても移民や移住の時期によって、目的や経験が大きく異なる。筆者が調査を進めているカナダにおいても、第二次世界大戦以前に移民した人々の子孫である二世や三世と、戦後移住の新一世や最近の移住者の間では、主たる使用言語が異なることもあって、生活圏が重ならない傾向がみられる。

第三の観点として、異なるエスニシティ間の関係を調整しようとする動きがあるのか否かが興味深い。多文化主義を標榜するカナダでは、高齢者集合住宅やナーシングホームにおいても、異なるエスニシティに開かれた構成を工夫し実践することが推奨され、「老いのエスニシティ強化」という傾向との調整が試みられている。だが、とりわけ「食事」に関しては、イメージも含め故郷の味への拘りの増加が観察され、エスニシティの異なる人々の共存と高齢者たちの希望をいかに満たしてゆくのかという点の調整が、具体的な課題の一つとなっている。ブラジルやアメリカの場合、高齢者の生活圏はむしろエスニシティを重視して運営される傾向があるということであったが、いずれも移民の国にあって、高齢者の生活圏の周辺文化における位置づけは、どのように受け止められているのだろうか。

時間の制約もあったがコメントに関して応答をいただき、とくに第二、第三の観点に関しては、カナダや日本との違いも含め、さらに議論を深める機会が期待される。このシンポジウムに参加することによって、ブラジルなどからの移民が増加し多文化社会へと変化を遂げつつある日本にあって、高齢者の生活全体の満足（ウェルビーイング）を構成する要素を探り、それらを充足させてゆくシステム作りに私たち一人一人が参加する際に貴重な視点を蓄積することができた。

（国立民族学博物館先端人類科学研究部教授 鈴木七美）